

製造工程の紹介に入る前に、国内の剣道具事情についても少し触れたい。

川辺さんによれば、現在、日本国内製の剣道具は、日本で流通しているうちの10%に満たないのではないかと。剣道具の工場としては日本剣道具製作所が最大規模であり、もちろん他にも国内に工場を持つ業者はあるが、ここまで大規模なものはない。さらに、小さな店の作業場で剣道具をつくっている人たちが各地にいるという状況だが、川辺さんの実感としては、国内でつくられる剣道具が月600組程度であり、そのうち450〜500組がここ日本剣道具製作所でつくられている。

別なブランドが  
同じ人の手でつくられる

そんなはずはない、という読者も多いだ

# 日本でつくる 剣道具

—— 剣道具の製造工程、すべて見せます

第2回 他社のブランドもここで作られている

撮影＝窪田正仁

る。しかし、一般の買い手にはわかりにくいのだが、剣道具業界の特殊性を知っておく必要がある。日本剣道具製作所は現在、全国各地の150店〜200店の武道具小売店・卸業者に剣道具を提供している。最も多い頃は250店と取り引きしていたそう

だ。その中には小さな小売店もあれば、大卸とよばれる大きな業者もあるが、この工場で作った剣道具がそれぞれの店のオリジ

ナルの剣道具として売られているのだ。中には誰もが知っているような有名ブランドもある。

「おもしろい例があります。たまに聞くことですが、A店の防具は硬い、それに比べてB店の防具は柔らかいと言われている。どちらもうちでつくった防具で、つくっている人は同じということがあります。小売店さんはそれぞれに色があるので、その色ニーズに合わせてつくり込むのが自分たち製造業の仕事です。たとえば小手布団が厚くて丈夫なのがいいと小売店さんがいえば、芯材を工夫して縫えばいいし、軽いものもいいといえ、それに合わせた技法があります。そこは80年の歴史があるから、なんでもできるんです」(川辺さん)

日本剣道具製作所では、小売店や卸業者の一軒一軒と「ここをこうしてくれ」「ここはこうした方がいいよ」と話をしながら各ブランドの剣道具をつくっているのだ。5年なら5年、20年なら20年の付き合いの歴史の中で固まってきたのが、それぞれのブランドの剣道具である。

「そのお付き合いの中で一緒につくってきた型紙というものがあります。防具の命で



案内人  
川辺尚彦

(株)全日本武道具、  
(株)日本剣道具製作所代表取締役

す。それは自分たちもこの小売店さんの商品はその店だけと決めていて、別な小売店には絶対見せない。それは絶対自分たちが守らなければいけないところです。ときどき、販売店さんより『あそこ同じ防具をください』と言われることがあります、『そんな近道はできません。今から一緒に考えて、一緒につくっていきましよう、さらに良い防具をつくりましよう』とお伝えします」(川辺さん)

歴史的に見れば、もともとは日本各地の小売店の多くが独自に剣道具をつくる技術を持っていたが、大量生産が必要になり外部に依頼するようになったという流れだろう。だが、川辺さん自身は、やはりその商



面の顎部分の金型。甲手や垂れなど、多くのパーツが型を使って製作されるが、各小売店用の型が日本剣道具製作所に多数保管されている



工場内はミシン部、面部、甲手部などに分かれている。もちろんすべてのパーツをつくれる上級職人もいるが、一つのことを長く続けている職人が多い

品がどこでつくられたかを、はっきりと消費者に示すべきという考え方を持っている。「ソニーのテレビはヤマダ電機で売ってもベスト電機で買ってもソニー。トヨタの車ほどの販売店で買っても、中古で買ってもトヨタです。誰がつくったのははっきり示

しておかなければいけないと自分は思います。このことは改善されている店舗もあれば、昔からの名残で明確にされていないところもあります」(川辺さん)

食品や日用品などでは、コンビニエンスストアチェーンなど流通・販売業者主導で商品を開発するやり方が、むしろ最近一般的になってきた。プライベート・ブランド、ストア・ブランドなどと呼ばれ、コンビニやスーパーに置かれている商品がそれである。しかしその場合でも製造者ははっきりと示されている。

そんな思いで、現在ここでつくられた防具には「日本剣道具製作所」のタグをつけて出荷している。そのタグと小売店が付けたタグのダブルネームになっているところもあるが、それは販売店と一緒に考えてつ



社屋は日本最大級の古墳群で知られる宮崎県西都市にある  
(株)日本剣道具製作所 <http://www.budouguseimon.com/>

くった商品であり、問題はないと考えている。しかしながらたまたま修理で戻ってくるなかには、元のタグをはずして自分の店のタグだけを付けている店もあるそうだ。

「一度お納めした商品、そこまでは管理ができていないのも現状です。私自身は私の会社でつくった商品なので自信を持ち納めさせてもらっています。そして自信を持って製造者表示をさせてもらっています。職人も最後の命の吹込みがタグと思っています。だから少し残念な気もします。それは私だけじゃなく他のメーカー様も同じ考えではないのでしょうか？ 名前は命ですので」(川辺さん)

### 自社ブランド「MUGEN」を立ち上げて変わったこと

川辺さんが経営を手がけてから、日本剣道具製作所では自社ブランド「MUGEN」を立ち上げた。

「枠にとらわれない、技術も無限で、今までもずっと存在していたしこれからも、というような意味を込めました」(川辺さん)

現在は、ここでつくる剣道具の半分ほどが自社ブランド「MUGEN」になった。小売店ごとに一つひとつ仕様を変えてつくるよりは、同じ仕様の物をつくる方が効率も上がる。そのことによって、かつては1カ月350組余りだったのが450組以上に増えたという側面もある。

営業部長の竹下和彦さんがこう話す。

「今までの会社は、うちでつくってお客様が使っているけど、うちの商品だという認知がありませんでしたが、MUGENと

いうブランドを立ち上げたことで、うちの商品という認知度が上がりました。今までの剣道具業界では、武道具店の店主が好んだ防具をお客さんに勧めていました。現在もお店の色がありますので、それは正解だと思います。しかしMUGENブランドが浸透して、お客さんのほうからMUGENの防具を下さいということも増えました。それが一番の変化ですね。扱ってくれる店も増えました。スポーツ業界でミズノの商品、アディダスの商品を目当てに買い物に行くのと同じで、やっと普通の状態になってきたのかなと思います」

\*

当然だが、日本国内でつくった剣道具の価格は海外製のものより高い。日本剣道具製作所が卸す価格は海外製の3倍、4倍である。しかしそれでも今、注文に製造が追いつかない状態だという。

「日本全国、小さい子から大人まで、求めてくれる人がいます。ずっと昔はいい物が求められていて、一時期安い物という傾向があったけど、ここ最近、またいいものをつという声が多くなった気がするんです。少し傾向が変わってきたのかなと思います。日本には職人さんが本場に少なくなくなってきています。私たちが宮崎の日本剣道具製作所以外に、岩手の久慈や、個人でされている職人さんは、本当に希少で日本の大切な宝だと思います。ふとした時、私たち日本の文化を想い出していただけたら幸いです」(川辺さん)

次号からは剣道具の製造工程を細かく紹介していく。